朝のこない夜はない

# 孝行のためではない、本当の親孝行を……

副山首　鈴木正修

人に親切にするということは相手の心に適ったことをしてあげるということですが、これがなかなかに難しいものです。こちらが良かれと思ってしたことが、かえって仇になることもあります。親孝行もよく似たところがあって、そう簡単なものではないと思わせる面白い話があります。これは心学道話の一つです。

心学とは徳川幕府の中頃、ちょうど八代将軍吉宗の頃から始まったもので、神・儒・仏の三道の精神を合わせて平易な言葉を用い、通俗な比喩を挙げて実践道徳の鼓吹に努めたものです。

石門心学の創始者である石田梅岩の言葉では、心学とは人間の持っている心という玉

を磨くための学問であり、そのために神道、儒教、仏教のそれぞれの良いところを使って、心を磨き高めるものだということでした。

では、「うーん」と思わせる奥深い親孝行の話を紹介します。

昔、近江の国に有名な親孝行の人がいました。その人が信濃の国にも有名な親孝行な人がいると聞いて、最善の親孝行とはどういうものか尋ねようと、はるばる信濃まで会いに行きました。

その人の家を訪ねると「息子は山へ薪を取りに行った」と言って、年老いた母親がひとりで留守番をしていました。

しばらく待たせてもらっていると、やがて息子が薪をたくさん背負って帰ってきました。母親は息子を出迎え「ご苦労だったね。くたびれただろう」と言って、背中から薪を下ろしてやり、草履の紐を解いてやりました。そればかりか、水で足を洗ってやったりまでしているのですが、息子は黙って母親のするがままにしているだけです。

これを見た近江の孝行息子は、信濃の息子が本当に親孝行なのか疑問を感じ始めました。

やがて息子が炉端へ座ると、母親が「今日はいつもよりたくさん薪を取ってきたから、さぞ肩が痛かっただろう」と言って後ろへ回り、息子の肩を揉み始めました。近江の孝行息子はとうとう我慢ができなくなり、信濃の孝行息子に言いました。

# 朝のこない夜はない（199）

「私はあなたが天下に名高い孝行息子だと聞いて、はるばる近江から孝行修行のために来たのだが、先刻から様子をうかがっていると、あなたは少しもお母さんを労ろうとしないばかりか、下女のように扱っている。これでは親孝行どころか親不孝ではないか」

すると信濃の孝行息子はこう答えました。

「私は親孝行とはどんなものか知らないし、努めて孝行をしようと思ったこともありません。ただ、母は私の草履の紐を解いたり、肩を揉むのを楽しみにしているようです。だから、私がそれを断ると母は悲しそうな顔をするのです。それで私は、母の言うなりに足を洗ってもらったり、肩を揉んでもらったりしているのです。もしかしたら、そのように何でも自然に任せて、母の思い通りにしてもらっているところが、私が孝行息子と言われる所以かもしれません」

この答えを聞いて近江の孝行息子は大いに悟り、〝自分は今まで形にこだわった孝行をしてきた。孝行のための孝行であった〟と気付き、まだまだ到らぬ点があったと反省したのです。

心学ではこういう話を使って親孝行の本質を教えようとしているのです。

孝道を尊んだ渋沢栄一は、親孝行な人に『孝経』を贈り、よくこの話をしたそうです。